

# セツ のりん

No.71



わたしたちは、自然災害や人的災害がもたらす、予測が困難で、対処や解決も容易でないリスクに対して、中長期的な展望をもつて対峙しなければならぬ局面に足を踏み入れている。価値や立場を異にする人たちが、どのようなかたちで共同し、コミュニティの復興・再生への歩みを進めているのかも問われている。3・11のあの震災と、これに伴う津波被害、原発災害、風評被害などの複合被害が人々の心と体、そして住み慣れた土地に与えた傷は深く、再生への道はまだ遠く長い。だが、「復興」と称して、あるいは復興ということばすらも忘れ去ったかのように、人のいのちを軽んじ、地域に育まれてきたつながりを分断するような施策が強行されている。この社会でも、子どもたちが学び育つ場においても、一人ひとりの生きる願い、営み、つながりをカネや点数に基づく効率という指標で切り刻み、人が生き合える育ち合う根としての地域の土壌の豊かさ多様さを損なう動きが進んでいる。絶望や疲労、不安を抱えながら、勇気をもって、たくましく新たな一歩を踏み出そうとしている人々のために何をなすべきか。愛する紫陽花のように集まり寄ったあの人々の輪に連なり、守るべきものを守り、たたかうべきものどたたかう！ そう誓う。

本田 伊克 (センター運営委員)

## ひと言 いま何を守り、何とたたかうべきか

### 目次

ひと言	本田 伊克	1
特集1 高校入試を考えるために 菊田さん・後藤さん(県教委)に聞く 「新高校入試を実施して」 中学校現場は新入試制度をどう受け止めたか	遠藤 利美 高橋 治彦	5 7
高校の現場から		
特集2 部活動について考える ラグビー部顧問を通して思うこと 私にとつての部活動 部活動と学校・教師の課題 これからの「部活」を考えるために	大橋 達 高橋 翔平 高木 克純 中森 孜郎	9 10 11 12
被災地の今とこれから 2年間の間借り生活から戻る	渡邊 隆	14
報告 フォーラム「子どもの今と未来を考える」 PARTⅢ「今、子ども時代を生きるということ」	須藤 道子	16
戦後教育実践書を読む会の報告 「体育の子—生活体育をめざして」(佐々木賢太郎著) を読んで	黒川 哲也	18
教室の報告 ピッカピカの1年生との楽しい生活	野田 由美	20
わたしの出会った先生 3 私と先生、そして	渡辺 玲子	22
本の紹介「黒い海の記憶」 センターの動き		24 24

## 特集1 高校入試を考えるために

菊田さん・後藤さん（県教委）に聞く

# 新高校入試を実施して

— 今回の入試を終えて、県教委としてはその結果をどのように見ていますか。

入試が終わったばかりで、まだ結論を申し上げる段階ではありません。これから入学者選抜審議会（以下、入選審）の中で評価・分析も行っていくしますので、そういった点をご承知いただいたうえで話したいと思います。

県教委としては、中学生が積極的に入試に関わってくれた挑戦してくれたとらえています。前期選抜で志願者が多かったというのはその現れであろうと。ある中学校の先生がおっしゃっていたのですが、自分の進路を早くから考えるようになっていた。夏休みあたりからすでに考えていたと。このようなことが前期選抜の倍率に現れたのではないかと見ています。後期選抜については、例年と同じような動きだととらえています。

ただ、積極的に受験した結果、前期選抜で不合格者が数多く出たということは事実です。この辺はお答えしている（つうしん68号）ところだと思いますが、保護者は複数回受験を望む、ところが落ちてみると保護者がそれはダメだという。我々としてもどうとらえていいのか。不合格の経験は厳しい試練だった

この春の高校入試から、推薦入試に替わって前期選抜という方法が導入され、各高校が示す「出願できる条件」を満たせば、誰でも受験できるようになりました。

本号では、昨年の「センターつうしん」68号に続き、新高校入試がどのような状況や結果をもたらしたのか、そこから見えてくる課題は何なのか特集を組みました。

また、前号に引き続き「部活動」も取り上げました。中・高生にとつて部活は、学校生活の大きなウエイトを占めます。部活があるから学校に行く、そんな生徒もいます。部活にはさまざま問題もありますが、部活だからその魅力や楽しさもあります。学校現場の実情も踏まえながら、部活についてさらに考えてみたいと思います。

かもしれませんが、結果的にその生徒が不合格のままということではなく、後期選抜で合格してほとんどが例年どおりにいったということを考えれば、大量の不合格者を出したという表現はちよつと違和感もあります。

中学校側からは、各高校それぞれが〈出願できる条件〉を示したことは中学生にとつては大変よかったのではないかとこの話をいただきました。ただ、目標に向かってがんばるといふところがある反面、やはり先ほどもお話ししたように前期選抜では受験者が多かったために倍率が上がってしまった。その結果、自分は希望の高校には行けないんじゃないかと思つて志望校を変えてしまう子もやはり何人かはいたと伺いました。同じ高校を何回でも受けられるということでチャレンジした子は希望どおり入っていくケースもだいぶあったのではないかと思います。自分の第一志望と違うところに入った生徒というのが実際のどのくらいいたのかはまだわかりません。

— 前期のあの倍率というのは県教委としては予想していましたか？  
そうですね、〈出願できる条件〉を見た段階で、仙台地区がや

はり倍率が高くなるわけですが、仙台一高が上がるのはやはり予想はしていました。ただ、仙台地区の高いところに行きやすいんですけれども、郡部の高校では、実はとても喜んでいる高校もあるんです。ある仙南の高校は、今回の前期・後期について高く評価してまして、今までよりもより積極的な生徒が来たと言っている。これは教務担当から聞いたわけですが、たぶん学校としては一致している意見だと思えます。悪いことばかりではなくて非常にプラスに評価しているという学校もあるわけです。各高校は条件にかなう、より積極的な生徒がほしい、勉強についても部活動についてもいろんな積極的な学校が求める生徒がほしいわけですね。そういった生徒が集まったところもあるようです。ですからクローズアップされるのは仙台市内の極めて倍率の高いところなんです。宮城県には、仙台市内とそれ以外と二つの面があるわけです。それを一遍に論じないといけないという難しさがある。仙台市内の方が声大きいものですから、どうしてもそういったことになるんです。

——中学校や高校の関係者から聞き取りをすると新聞にありますか？  
アンケートとかそういうものではないのですが（出願できる条件）等、変更はほとんどないのですけれども聞き取っていくというところなんです。あと各高校から今回の入試を終えての要望とか意見は出してもらっているので、そういったところをちよつど分析中なんです。

——やつぱりいぶん今回の入試は反響があったということになりますか。

制度に関する要望というのは実はそんなに多くはなかったんです。細かな手続きのところなんです。高校側とすればこれはどうなんだ、あれはどうなんだという迷いがむしろストレスに

なつたんだと思います。そこを意見をとして出してくてますので、むしろ制度というよりも事務作業の改善を求める意見が多いですね。

——中学校は？

中学校側は、今から聞く段階なのです。中学校の校長会などでお話を出していたら、さつき申し上げた入選審で検討する予定です。ある地区の中学校の校長先生に意見をいただいたところ、高校側とほとんど同じような指摘でした。制度そのものについてこうあるべき、とかいうのはほとんどないのです。

——5,000人という子どもたちが不合格になっていますか？

この事実はきちんと受け止めなければならぬと思います。ただ、すぐに解決の手立てについて、抜本的に制度を改めるという段階ではないと思います。ご想像に難くないように今の段階での制度変更は、かえつて混乱を招き、受験生に迷惑をかけると思います。それは、入試制度としてあつてはいけないことだと考えます。

——このような高い倍率が続くんだと、このままでいいのかなと気になるんですか。

高校からは、これだけ前期で人気があつたんだから枠を増やしてくれという要望もあります。しかし、今回は初めての実施で、また後期選抜の存在があまり注目されませんでした。昨年度の一般入試と比較して、倍率は下がつて、不合格者が減つてい



— 今回の入試前に中学や高校の先生と話す機会があったのですが、  
どちらもこんなに受験者が多くなるとは思っていなかったよ  
うでした。

生徒自身もそうですが、保護者も、やっぱりどうしても早く  
決めてしまいたいという心理がかなり大きいと思います。校長  
推薦がなくなり、だれでも出願できるようになったことで、そ  
ういった動きが予想以上にあつたんだと思います。

— 今回の入試について新聞報道などは、ずいぶん厳しく報じていま  
すが……。

恐らく批判というのは一点、5,000人も落ちたということこ  
ろなのかなと思います。それ以外は保護者の要望を満たして複  
数回の選抜をやっていますし、そういうところだと思っています。

— 出願条件にある評定値ですが、今回は2,3年時の評定が対象で  
したが、今度からは1年から3年まですべての評定が対象にな  
りますよね。中には4・8というほとんど5に近い数値もありま  
す。子どもの中学校生活を考えた時にどうなのかなあと。1年  
の頃は何をやっているのかわからない子が、2年の途中に何か  
きっかけがあつてそこから夢中になつて勉強するとかいろいろ  
タイプとしてありますよね。

2,3年の評価のみだと、1年生の頑張りを認めてあげることが  
できなくなる。中学1年生の学習や活動も、2,3年生と同様に  
大切な学習なので、いろいろ迷うことはあつても、やるべき学  
習は1年生からきちんとやってほしい。また、部活動などでも  
1年生で活躍したけれども、あと怪我だったりということもあ  
ると思つてんです。その場合だと1年の時を切り捨てて2,3年だ  
けしか見てあげないというところを評価し  
てあげられないということになつて、それはまずい評価の仕方  
になりますね。

— 条件というのは、条件によって受験できる者できない者をつ  
くってしまうというのはあるわけですからね。それが果たし  
て前期・後期、後期があるからいいじゃないということ、  
そういう枠が認められるのはいいのかどうかというのはやっ  
ぱり課題ではないでしょうか。前期選抜が出た時に中学校現  
場で大騒ぎしたのは条件ですよね。ところが実際の試験が終  
わったら条件のことはどこかに吹っ飛んでしまつて、違つて  
とで騒いでいますね。

全部の高校で評定平均の条件を出して、出願を減らせれば不合  
格者は減り、不合格者が多いという批判はなくなつたのでしょ  
う。逆に、条件を緩和して、だれでも受験できるように配慮す  
れば、さらに多くの不合格者を出すことになつたでしょう。

— そりゃ、そうでしょうね。

実は、〈出願できる条件〉に似たものは推薦の時もあつたんで  
す。各学校でこういう生徒がほしいということ、中学校に出し  
ていたんです。今回の〈出願できる条件〉を見ると実は推薦の  
時のものを基に作成しているのがとても多いのです。

— オープンにされなかっただけということですね。

評定の条件を出している高校についても、4・8とか4・5と  
かなんていう数値ではなくて、極めて優秀ですとか、そういつ  
た文言で表現してました。それを〈出願できる条件〉の案とし  
て一度提示したんですけれども、中学校側でそれでは漠然とし  
てわからないのはつきりしてほしいということ、それで4・  
8等の数値を出したわけですね。のっぺらぼうのように同じよう  
な高校ばかりではまずいわけで、学校が求める生徒像が様々あ  
り、学校ごとに特徴をもっていればこそ生徒も選択できるわけ  
です。

—今後の入試についての対応や見通し、スケジュールなどはどうなりますか。

最初に申し上げましたように評価・分析につきましては、入選審という審議会のなかでどういった方面から分析するか、どういった見方で分析するデータを取るかとということを含めて話し合いますので、これはやはり1年間かけてということになります。基本的には2年間間は出願できる条件等ほとんど変えま

せん。ただし、一部不具合があったところは訂正しますけれども、それ以外は変えないというところでやっています。

一方、2年間実施しつつも3年目は〈出願できる条件〉等変わってくるというところがありますけども、制度そのものはその時点で変更するところまでは行きません。その中で、こういった不合格者が多い点ですとか、中学校・高校の事務作業量の多さをどう審議会で判断して、直近という意味ではなくて、今後に生かしていくことはあると思います。

## 中学校現場は新入試制度をどう受け止めたか

遠藤 利美

新しい入試制度でよかった点をあえて挙げるとすれば、「前期入試で不合格だった子どもたちの間の団結力が強まったこと」であろう。

2月13日、前期入試の合格発表の翌日のこと。朝の学年打合せで一人の担任が「前期選抜で不合格だった生徒は朝のうちにホールに入れてフォローしたほうがいいんじゃないですか？ ずいぶん落ち込んでいますよ」と言った。T中学校の3年生は前期入試を53名受験し合格者が14名であった。なんと不合格者は39名にのぼる。その日は学年末試験2日目でもあり、受験に落ちたショックを少しでも早く軽減してあげたいという思いからの提案であった。

教室では子どもたちが試験に向けた朝学習をしている時間に、39名の子どもたちはホールに続々と集まってきた。元気なく気恥ずかしそうに入ってくる子どもたちであったが、集まってくる仲間の多さにだんだん表情が緩んでくるのがわかった。「落ちたのは自分だけじゃなかった」という安心感から来るのだろう。

ホールでは私から、①「そもそも前期選抜では募集定員の2割しか取らないこと」、②「前期選抜は後期選抜で楽々合格するような成績上位者しか合格できないシステムであること」、③「昨年からは本番は後期選抜だとやってきたこと」を話し、今回の不合格で落ち込んだり弱気になって受験

校を変更したりなどは不要だと強調した。子どもたちは幾分気が楽になったように見えた。皮肉にも「不合格者がこんなにいた」「自分よりも優秀だ」と思っていた友だちも落ち込んだ」という事実が彼らを救ってくれたようだ。こうして無事、初めての前期選抜入試を乗り越えることができた。

新入試制度をめぐっては、今年度の実施によりさまざまな課題が明らかになった。私は今年2月に実施した宮教組アンケートに寄せられた中学校現場からの声をもとに、なぜこの制度が子どもたちや保護者の願いに叶っていないかを指摘したい。

### 1 前期選抜の弊害

#### (一) 序列化された高校

県教委はこの間、「行ける学校から行きたい学校へ」をキャッチフレーズに、高校を序列化し偏差値で輪切りにするような考え方や、生徒が成績のレベルで受験校を選ぶような進路指導を戒めてきた。それを受けて中学校では、子どもたちが「その高校で何をしたいか」を考えさせ選ばれる進路指導を行なってきた。

しかし今回、これまでの中学校での努力は無駄になった。県教委が各高

校に「前期選抜の出願条件」を出させ、多くの高校が基準となる内申点を設定したことで、これまで表立っては出されることがなかった高校の成績による序列が明らかになったのだ。子どもたちや保護者は学年評定を意識し、「この高校なら受験できるか」という視点で高校を見るようになった。

## (2) 希望する高校の受験をやむなく断念する子どもたち

さらに問題だったのは、県内で前期選抜を受験した8,000人のうち不合格者が5,000人も出たことで、不合格になった多くの子どもたちが傷つき、自信を失い、「もう同じ高校は受験しない」と言い出したことである。後期選抜を受験すれば高い確率で合格できそうな子どもたちも多く含まれていた。前期選抜で課されている志願理由書にあれだけ「入りたい理由」を書いていたにもかかわらず、である。

推薦入試のときの経験からある程度は予想されていたものの、今回は学科試験を受けて不合格になったということもあり、「もうこの高校には入ってもらえない」と受け止められたようだ。一年前、中学校を訪問してきた近隣の公立高校長が「こわいのは、うちに来てほしい生徒が前期選抜に落ちて他の高校に行ってしまうことです」と話していたことを思い出す。この制度は高校にとっても中学生にとっても損失が大きすぎる。

## 2 複数回の選抜を行うことに意味はない

前期選抜で合格した生徒がもし後期選抜を受験したら、不合格となる確率はほぼゼロであろう。普通に受験すれば上位20%の成績で合格する生徒たちだから当然である。であれば、前期・後期選抜を一本化して1回で入試を行なった方がよいのではないか。メリットは前期選抜で多くの子どもたちに無意味な不合格体験をさせないで済むこと、実力があれば希望の高校に合格することができることである。実力があっても弱気になって他の高校にやむなく進学する悲劇を少なくすることができる。

県教委は「県民が複数回の受験機会を求めている」というアンケート結果を新制度づくりの根拠にしたため、自縄自縛に陥り「すぐには一本化は難しい」と考えるかもしれない。しかし、当時県民は「複数回受験できれば合格の可能性が高まる」と考えたのであり、高校がいわゆる成績優秀な子どもたちを青田買いするような制度は求めていない。多くの先進県が導

入しているように「入試を一本化し、その中で特色重視、学力重視の多段階選抜を行う」というのが理にかなっていると考える。

## 3 新入試制度が抱える問題点

### (1) 中学校生活を大きく歪める

「新入生には無邪気に中学校生活を送らせた。一年生が入学直後から内申点を気にした生活を送らざるを得なくなることに違和感を感じる」これは仙台市中心部の中学校教員の嘆きである。情報を先取りした保護者が子どもの将来を心配するあまり家庭でハッパをかける姿が浮かぶ。また、部活動の保護者会で「先生、前期試験がかかっているので部活指導よろしくお願いします」と保護者に直接言われ面食らったという話も聞いた。さらにある学校では、生徒が「欠席日数が少ないことを条件にしている高校があるので」欠席日数を増やしたくないから具合が悪くても休みませんと言ったという。前期選抜の志願条件が出されたことで中学校教育が大きく歪められつつあることを危惧する。

### (2) 部活動実績に関わる「条件」の不公平さ

部活動の実績を志願条件にすることが、部活動の教育的意義を歪めることは指摘した。100歩譲って「部活動の実績」を志願できる条件にすることがあり得るとしても、現場の教員や保護者が納得できなかったのが基準に対する不公平感だった。種目によっては、どの学校にも部があり競争が熾烈で勝ち上がるのが難しい種目やそうでない種目があること、学校によつてスポーツ少年団があり専門の指導者や顧問がついている部とそうでない部があることなどの現実を無視して、一律に「県大会出場」などの基準を設けていいのかという疑問である。

他にも前期選抜に関わって中学校の教育活動に支障をきたすほどに進路指導、進路事務に要する時間が増加したことや、前期選抜の合格発表から後期選抜の出願高校決定までの期間が短く生徒や保護者に負担をかけたことなど、今年度の入試終了後、挙げればきりがなほどの問題点が浮き彫りになった。この制度の一刻も早い廃止または当面の課題の改善を求めたい。

# 高校の現場から「新入試制度」をめぐる問題

高橋 治彦

## 1. 宮城高教組としてのこの間の入試制度に対するスタンス

宮城高教組では、この間、推薦入試の廃止、入試の「一本化」を求めてきました。この度、高校教員に加え、中学校現場・保護者・生徒からの批判を受け、推薦入試が廃止されるにあたり、私たちの望む「一本化」が実現することを期待していましたが、県教委は、現場の教員の声を取り入れず、保護者・生徒のアンケート結果から「複数の受験機会」の維持を求め、保護者・生徒の願いを受けて、前期・後期の入試制度の導入を決めました。私たちも、保護者や生徒の願いを受けとめることの重要性は理解しますが、新入試制度が、生徒・保護者の願いを叶えるものにならないことは制度設計が進む程、明らかになりました。

## 2. 全国から批判の声が挙がる「宮城の入試制度」

全国的に前期・後期入試制度の導入例は多く、他県では弊害の大きさから、「一本化」へと移行する県が続出しています。このような状況の中、私たちが所属する全国組織の集会で、度々「宮城の新入試制度」について報告しましたが、その場で一様に「驚きの声」が挙がったのは、県教委の求めにより高校側が設定した「出願できる条件」でした。今までも学校のコンセプトを示す「本校が望む生徒像」を設定していましたが、それはあくまでも学校が求める「漠然とした理想像」を示すものに過ぎませんでした。

しかし、今回県教委が各学校に求めた「出願できる条件」は「評定平均値〇〇以上」「県大会出場」「英検〇級、漢検〇級以上」と中学校における「成果」を明確に示し、出願できる生徒を予め絞り込むものでした。これは同様の制度を設けた県での、「前期での異常な高倍率」を避けるために為された側面もありましたが、その一方、「漠然とした」条件を示した学校もあり、その結果、「前期での異常な高倍率」が生まれたことを考えると、この「出願できる条件」の持つ意味は何だったのか、疑問が残ります。

集會に参加した全国の教員・保護者からは、「中学校の評定は、統一された基準で評定されているとは言えないのに、出願基準にしているのか?」「公立の高校が、学校に必要な生徒像を示し、自らをランク付けすることがあっていいのか?」「必要な不合格体験を強いることに何の意味があるのか?」等、強い「違和感」が表明されました。

## 3. 「出願できる条件」をめぐる不穏当な動き

「新制度」下における入試については、高校現場では当初、あまり深刻に受け止められていませんでした。批判の多かった「出願できる条件」についても、高校教員の意識としては、「推薦入試での内規をオープンにした」という受けとめで、全国で聞かれたような批判の声を伝えても、「そういう考えもあるね」という程度の反応しか返ってきませんでした。今までと大きく風向きが変わったわけではないというのが現場の受けとめでした。

しかし、「出願できる条件」を精査してみると、「今までどおり」とは必ずしも言えず、今回の入試制度を「学校浮揚」の手段として用いる動きが一部で見えてきました。顕著な例は、「評定平均値の水増し」でした。ある学校では、今まで推薦入試の時の受験生にはなかった「高いレベル」の評定平均値を設定し、自分の高校の「ランク付け」を「水増し」する手に打って出たという話もあります。このような「歪んだ動き」はそれほど多く見られたわけではありませんが、新制度による「歪み」を象徴する動きであったと思います。

## 4. 「新制度」下の入試の中で起きた様々な混乱

今回の「新制度」における入試は、最初ということもあり、様々な混乱が起き、それは私たちの予想を超えるものでした。以下に幾つかの特徴的な例を示します。

(1) 高倍率は学校の格付けを上げる？

「出願できる条件」を「漠然とした」条件にした伝統校では、予想通り、非常に高い倍率になりました。あまりに高い倍率について、高教組のブログで批判的見解を書き込んだところ、卒業生の方から、「倍率が高くて何が悪い」という苦情の電話が来ました。卒業生にとっては、「自分の学校の格付けが上がった」と喜ぶ声があり、「誰のための制度」なのか、更に疑問を強めることになりました。

(2) 喜びの場ではなくなった合格発表

今回、前期入試で例年の推薦入試にない高倍率を記録した高校では、合格発表時に「異様な風景」が見られました。昨年度までの推薦入試では、ほとんどが合格し、部活の勧誘も兼ね、在校生が合格のお祝いをしてきたのですが、今回は不合格者が多数を占めることが分かっていたため、自粛して勧誘をせず、受験生も掲示板を見ても、表情を変えず「非常に静かな」合格発表であったとのこと。その光景を目の当たりにし、「合格発表で喜ばない制度でいいのか？」という疑問がわいたという報告を受けています。

(3) 「新入試制度」によりはじき出された受験生の行き場は？

また全県での出願者数が推薦入試を大幅に上回った結果、例年の推薦入試より志願者が大幅に増えた学校が続出しました。推薦入試で定員を超えることが無かった学校でも、定員を大幅に超える出願者が殺到し、通常の勤務時間で入試事務を終えられない学校が多く見られました。その中には、塾が示す学校のランク付けで、全日制のボーダーに分類される学校も含まれており、例年になく多い不合格者を出したその高校に入学できなかった生徒が、どの高校に進学したのかを心配する声が届いています。

5. 「新制度入試に対するアンケート」の結果から見えてくるもの

高教組では、今回の「新制度入試」を終えたところで、各高校に対し、アンケートをとりました。組合員を通し、直接进入事務に携わった方にアンケートをお渡しし、回答を求めました。回答者29人のうち、3分の1は未組合員、半数以上は入試事務に中心的に関わった方からの回答でした。アンケートの詳細は紙面の都合上掲載できませんが、特徴的な「意見」は

下表のようなものになるかと思えます。

## 6. おわりに

今回の「新制度」における入試は、そのスタート地点である「複数の受験機会」を必ずしも担保しない点で、大きな問題を持つものです。その上、各学校が自らの学校の「ランク付け」を行ったことは、「公教育」として許されないことだと考えます。「高校授業料無償化」は、「高校教育は全ての国民に保障されるべきものである」ということを明確に示したものである以上、本来「公の高校教育」は全ての国民に対し平等に開かれるべきものであるはずです。

国連の「子どもの権利委員会」が、日本の教育環境を「過度の競争に関する苦情の声ががり続けている」ことに、懸念とともに留意する。委員会はまだ、このような高度に競争的な学校環境が就学年齢層の子どものいじめ、精神障害、不登校、中途退学および自殺を助長している可能性があることも、懸念する。」と述べている通り、日本の教育をめぐる状況は、国際的にも異常であり、様々な教育を巡る問題がこの「過度な競争」に起因することを指摘せざるを得ません。

国際的にも憂慮される「過度な競争」に拍車をかけ、意図的に「勝ち組」「負け組」を生み出す今回の「新入試制度」は公教育を歪め、保護者・生徒の思いに合致しないものです。宮城高教組は、全ての県民にとってよりよい入試制度を求め、運動を強めていく決意です。

(宮城県高等学校・障害児学校教職員組合書記長)

- 1 学校現場の多忙化に拍車をかけ、その結果、在校生にしわ寄せが来ている。
- 2 推薦入試と比較し、「客観的」な選考がなされたという声がある反面、「客観性」を担保するために点数化が求められた「面接」「小論文」の点数に「客観性」があったのかという疑問も寄せられている。
- 3 「受験機会の複数化」といいながら、前期で志望校を受けられない生徒が数多くいる。
- 4 「定数内不合格」が前期でも、後期でも増大した。
- 5 前期選抜が本来に必要なのかという疑問。また、前期選抜の定員の少なさは問題だ。



## 特集2 部活動について考える

### ラグビー部

### 顧問を通して

### 思うこと



大橋 達

ラグビー部顧問になることを断ったことはない。むしろ、ラグビー部顧問になるために採用試験を受けたとさえいえる。もつとも全ての高校にラグビー部があるわけもなく、無事採用されたあと、最初はサッカー部の顧問になった。「フットボール部って名前にして徐々にラグビー部にしちゃおうか……」などと思い、サッカー部にラグビーボールを譲らせたりしたがそう思うようにはいかず、ラグビー部への移行計画が成功することはなかった。その後、幾度かの転勤を経て、ラグビー部がある学校にたどり着いたときは、本当にうれしかった。

しかし、何でそこまでラグビーにこだわるのか。それは、私が高校時代に唯一、本気で打ち込んだのがラグビーだったからだ。私は当時、法学部に入りたいくせに、勉強には全

く後ろ向きだった。やらねば自分の夢が実現できないのにやりたくない。「自分のために勉強せねばならない、しかし勉強は分らないし、とにかくやりたくない」そんな勉強に対するジレンマの中で、ラグビーというスポーツには素直に立ち向かうことができた。時には「練習したくない」とか「一所懸命練習したのにできない」「こんなに頑張ったのに負けたりなど困難や挫折も味わったが、高校時代やり遂げることができたのが、ラグビーだった。

高校教員の職務はいうまでもなく、授業をすることだ。近頃は不登校や進路の悩みなど、ずいぶん生徒の相談に乗るなどの仕事も増えたが、何と云っても教員の職務は授業が一番だ。しかし、生徒がそんなに授業が好きかと言えば、否である。この頃の生徒は高校生活が楽しいらしい。そう答える生徒が多いのだが、彼らに授業が楽しいかと尋ねれば、「楽しい」と答える者は、まずいない。

高校生はその3年間で驚くような成長をとげる。高校生にとつての高校は生活の場であり、なくてはならない存在だが、授業を受けるといっただけの場所ではない。授業以外での高校生活とくに部活動での仲間作りや友人関係は、一生を左右するような出会いや出来事をもたらす。一方、授業は1年単位だ。結果

的に3年間学級担任したり、3年間教え続けることがあっても、それはいわば偶然だ。成長著しい疾風怒濤の3年間を最初から最後まで見続けることに決まっていることなどない。

しかし、部活動の顧問になれば生徒の高校生活3年間を見守り続けることができる。「教員の仕事って何ですか」と尋ねられることがよくある。そんなときは「人間の成長を支援すること」と答えることにしている。教員を志望したのもそんな理由だ。生徒を3年間支え、成長に関わるものは、やはり部活動だ。思うような成績がとれず、部活動を続けるべきか悩む生徒の相談や、勉強が苦手はどうしたらいいか分からないという生徒からの相談などまさに、自分が高校時代に味わった悩み

に苦しむ生徒が今日もいる。そんな生徒の相談相手となれるのも、自分が高校時代部活をした経験を持つ顧問だからだと思う。しかも、部員との関わりは高校時代に限ったことではない。彼らは、卒業後も先輩となつて学校を訪ねてくる。彼らは「どうですか今年の1年生は」などと話しかけてくる。見返りを求めず、コーチを買って出る者もいる。披露宴などでは元部員、顧問が丸となつて校歌を歌う姿など、仲間を通り越したいわば同志の姿が映し出される。ラグビー経験者ということだけでコーチを引き受けてくれた縁で、現在も親しくして居る方もいる。高校時代、ラグビーを教え

てくれたオカチュー先生は、今でも私にとって特別の先生だ。

もちろん、現状の部活動には多くの問題がある。いじめや体罰の遠因となる部活動の旧時代の体質は、明らかに問題であり、根絶せねばならない。これだけ体罰という名の暴力行為が問題になっているにもかかわらず、処分される教員が後を絶たないのは、部活動の指導の根幹に関わる問題でもある。今年、我々教員が暴力行為をどう捉えるか、しっかりと認識と教育としての部活動を考え直す転換点と考える。

また、昨年度末から実施された在校記録簿によって200時間を超える残業の教員さえいることが、明らかとなった。最も大きな原因は、休日の部活動指導だ。過労死危険状態を超えると思われる、残業が月40時間以上で3ヶ月以上その状態が続く教員は、職場のあちこちにいる。何を隠そう私もその一人だ。教員にとって部活動指導が、健康や家庭に暗い影を落としていることも事実だ。離婚問題に発展した話も聞く。私はラグビーが好きだから、ありがたいが、自分が指導できない部活動の時には、正直部活に時間を取られるのは苦痛な面もあった。専門でない顧問に指導される部員も不幸だ。生徒や保護者から、部活動の面倒を見てくれる顧問がなくて困っているなどという話も聞いた。そもそもスポーツなどの指導を学校が行うべきなのかという疑問は以前から出されている。学校から切り離してスポーツ少年団形式にしてはどうかという議論は、現在まで続く大きな課題だ。

だが一方、大きげに言えば、部活動には思想信条を超えた人間と人間のつながりが、確かにある。

(多賀城高校)

部活ってなに？

私にとっての

部活動



高橋 翔平

私は中学、高校と野球部に所属していた。どうして野球部だったのかと問われれば、単純に野球が好きだったからと答えるだろう。ただ、そのように簡単に言えるのは、部活動をやっていた、というその当目を客観的に見れる立場に今あるからであって、実際に活動していた時は、どうして野球をやっているんだろうかと自問自答したこともあった。それは特に高校時代においてである。練習は週一回の休みのみで毎日あるし、その練習内容は肉体的にも精神的にもきついものであるし、試合に毎回出場することができるとはないういしと、正直辛いと感じる場面のほうが圧倒的に多かったと思う。それでもなぜ3年間続けてこれたのか。当時の気持ちだと、ここで辞めてしまったら、なんかかっこわるい今までやってきたことが無意味になるような気がして、辞めるといふ選択には至らなかった。

これは消極的な理由であると思う。だがやってきた当時はそのようにしか考えることができなかつたのも事実だ。今思えば、どうしてあんなにきつい練習をくじけずにやってきたのかという理由は、ただ好きだからやっていったんだと、それだけである。野球がうまくないと思うのなら、苦しい練習や厳しい指導があつて当然だと考えていたし、それにも音を上げるようならそこまで野球に対する気持ちになかつたのだと思われていたと思う。今日の部活動ではよく体罰問題が話題に上がっている。それは部活動の目的を指導者側が履き違えているから生じる問題である。特にいわゆる強豪校というところは、勝利至上主義のもとで活動を行っている場合が多い。そのため、勝つためならという理由で指導が行き過ぎてしまうのだ。それは学校側、指導者側の都合であつて、実際にプレーする選手たちは小さいころから野球というスポーツが好きでバッティングが上手くなりたいたとか試合で活躍したいとか、至って明快な理由のもとで活動を行っているのである。チームのため、勝つためというのは、ある意味副次的なものではないのか。もう一度部活動の本当の意味を考えてみる必要がある。

(大学生)



# 部活動と

## 学校・教師

### の課題



高木 克純

#### 1 「部活が負担」が8割

理由のトップは「活動時間」

2番目は「専門外」

昨年度、宮教組が実施した部活動に関するアンケートの結果、回答した教職員の約8割にあたる77.9%が「部活動を負担に感じる」とがある」と回答しました。また、残る2割の人も何らかの改善意見を持っており、部活の矛盾が極めて大きいことを示しています(私は、この3月まで宮教組教育問題検討委員会に所属していました)。

アンケートで、負担の最大の理由は「活動時間」に関するものです。土日が練習や試合でつぶれる。我が子をそっちのけにして部活に向かう。毎日、勤務終了時刻を過ぎても帰れない。本務である授業準備などは部活が終了してから、などの悲痛な訴えが並びました。

2番目の理由には「専門でない」部活の指導にあたっていているというのが53%ありました。そもそも部活の免許があるわけでもなく、研修も受けていません。「専門である」場合は、体育の教員であって、大学で柔道を専攻し柔

道部を担当する場合とか、音楽大学で管楽器を専攻して音楽の教員となり、吹奏楽部を担当するとか極めて限られています。自らはやったこともない種目を、初めて担当したという教員も大変多いです。「専門でないのに、危険が多い柔道を受け持ち、正直なところ不安が大きいです」という切実な声もありました。

#### 2 部活の意義 大事な活動

しかし教育課程外の位置づけ

部活動が果たしている役割・教育的意義は大きなものがあります。生徒の卒業文集にも「部活動」に関する題材が多いですが、そのくらい、生徒にとって中学校生活の中で占める比重は大きいのです。生徒の思いを尊重するからこそ、教員もがんばってしまし、がんばらざるをえないという声も多くあります。

一方で、文科省や県教委など教育行政の側は、残業や手当の問題など様々な矛盾を放置し続けました。ようやく新学習指導要領で部活動は「教育活動の一環」と位置づけましたが、いぜんとして法的根拠は曖昧なまま、矛盾する部分は個々の教員の「自主的業務」として扱っています。「自主的業務」であることもあり、職員室の中で、部活の矛盾について論議されることはないというのが多くの中学校の実態でしょう。いわば、部活問題は中学校の中で「タブー」となってきたのです。

#### 3 部活過熱化の原因

勝利至上主義その背景

大阪の桜宮高校で起こった体罰事件。背景に勝利至上主義の問題があります。また、部

活の問題を論議するのが「タブー」となっていたこともあると考えます。「暴力をふるっていた」顧問のやり方を執意による『愛のムチ』と思ひ込み、周りが一切口出しできない閉鎖的な環境ができ上がっていた恐れがある」(2013.1.11 中日新聞社説)との報道にもあるように、がんばっている(と思われる)同僚への遠慮があつて、自分の思いを表せない。このことは広く、職員室の中に広がっています。ただ、教員が勝利に熱中してしまふ。その背景も問う必要があると思います。中学校の部活動を歴史に沿ってみます。

戦後、新制中学校が生まれ、その中で始まった部活動での対外試合について、1948年の文部省通達(文体発75号)は「宿泊を要しない程度の小範囲のものにとどめる。」とし、「但し、この年齢層では対外試合よりもはるかに重要なものとして校内競技に重点をおく」としています。また、「選手は固定することなく、本人の意志、健康、年齢、操行、学業その他を考慮してきめる」とも掲げています。ここには、当時の文部省が運動部活動の中で何を育てるかが示されていると考えます。好ましい人間関係の育成、スポーツに親しませることを第一として、健全な精神と健康づくりに役立たせるといったものです。選手となる経験をあらゆる生徒に持たせることを通して、責任感を育むことや緊張感のある中で成果を出し切ることの経験を積ませるなども、ねらいとしてあつたのでしょう。もちろん、学業も重要とされています。学業と部活動の両立です。以上の観点からすれば、対外試合

は必要最低限でよく、「はるかに重要なもの」は校内で生徒たちが行う競技でした。ここには、勝利至上主義に結びつくような要素はまったく見られません。

しかし、対外試合の制限はしだいに取り払われていきます。文部省は、1954年、「府県大会」を認め、1957年には「宿泊を要しない」範囲であれば、隣接県への競技参加を認めます。さらに1961年、宿泊制限を緩和し、水泳について全国大会を認めました。そして、1969年、「学校教育活動外の運動競技会」として、すぐれた小中学生を選抜して行う全国大会を承認、そして1979年には、「学校教育活動としての対外競技」としても全国大会を認め、今日に至ります。

文部省の対外試合の拡大承認の行政が、運動部活動だけでなく文化部活動でも、全国大会を頂点として競いあう勝利至上主義を生んだ要因と言えるでしょう。そして、この拡大承認の背景に、国際的な競技力を持つ選手強化対策を求めるスポーツ団体の要求があったことは、東京オリンピックを3年後にひかえた1961年に出された、保健体育審議会の答申などを見れば明らかです。

ドイツなどヨーロッパ諸国では、選手強化は地域のクラブなど社会体育に委ねたのですが、日本では学校に委ねたところに、大きな差があると同時に、日本の学校教育がこうむった損害があります。

文部省は、競争を推し進めながら、一方で、生徒の健康や学業に支障をきたさないために、「勝利至上主義にならないように」と何度も言及しています。対外試合への参加を「国、地

方公共団体」や「中体連」が主催又は共催のものに限って認めることとしているのも、そのためでした。「学校教育活動外」として参加を認める国際競技等に出場する選手についても、「学校としても、保護者及び関係競技団体と連携して、児童生徒が競技会に参加する状況を把握すること」と通知しています。

私たち中学校の教職員はあらためて原点に帰ることが求められていると思います。部活動の本来の目的を職員室の中で、その矛盾についても本音を出しあって語るべきこと。そのことが求められていると考えます。

(白石・小原中学校)

## これからの「部活」を 考えるために



中森 孜郎

昨年12月、大阪市立高校バスケットボール部主将の男子生徒が、顧問教師による体罰が原因で自殺した事件をきっかけに、部活における体罰が社会問題化しました。文科省は対応策を講じるため有識者会議を立ち上げ、5月27日に、部活指導の指針を策定、それを学校現場に到達することになりました。しかし、その内容は、どの線を越えると体罰にあたる

のかといった線引きが中心で、対症療法的なものに過ぎません。

問題の真の解決のためには、体罰の根本原因は何なのか、部活やスポーツの本質は何なのか、そして学校は子どもたちのスポーツ要求にどこまで責任を負うべきなのかなどについて、議論を深めていく必要があると思います。

そもそも、「部活」とは何の省略語なのか。一般的には、運動部活動とか文化部活動の省略語と言われます。しかし、私には、明治18年頃、当時の東大の教師であったイギリス人フレデリック・ウイリアム・ストレンジが近代スポーツをわが国に紹介したとのことなので、あるいは「倶楽部」活動の通称ではないかとも思われます。すると、スポーツをもろもろに楽しむ部ということになります。

私自身、アジア・太平洋戦争の最中に、旧制松山中学で学びましたが、体操・武道・教練の授業では体罰が日常的でしたが、ふしぎとバスケットボールの部活は生徒が主体で、体罰は全くなく、のびのびと練習や試合を楽しんだものです。

戦前の体育は、体操・武道・教練が主な内容でしたが、戦後の体育はスポーツ中心に変えました。そして、1951年学習指導要領（試案）の「特別教育活動」の中に「クラブ活動」が位置づけられ、その重要な目標が「生徒の余暇活用」とされ、「生徒がクラブ活動の中心である」と強調されています。

その後、この「クラブ活動」は小・中・高とも必修化されますが、なぜか、戦前からの「部活」は、そのまま存続し続けます。そして、

2008年、必修「クラブ活動」が中・高で姿を消した学習指導要領で次のように記されています。

「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感・連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。」

これによつて、戦前から慣行として行われてきた生徒主体の「部活」が、教育課程外とは言え、「学校教育の一環として」公的に位置づけられたこととなります。しかし、学校は、子どもたちのスポーツ活動への要求に、どこまで責任を負うべきなのか、それは依然として曖昧です。

ところで、部活における体罰の原因は、戦前からの精神主義や、最近の勝利至上主義・メダル至上主義にあると言われています。その背景にはプロスポーツの発展による商業主義や、オリンピックや国際試合による国家主義化があると考えられます。また急激な少子化に伴う私学の危機の中で、特別進学コースの開設とともに、スポーツで自校の存在をアピールするようになったことも、一つの要因になったと思われる。

しかし、スポーツという文化は、国のためとか、郷土のためとか、学校とかのために行うべきものではなく、音楽や美術や囲碁などのように、個人の楽しみとか自己表現として行われるものです。SPORTは娯楽とか気晴らしという意味であり、PLAYは遊ぶと

か、演じるという意味で、音楽の演奏も芝居の演技も同じです。そして、スポーツや芸術を愛する人は、それを通じて自己の可能性をひらき、人生をゆたかにし、他者との交流を深めていくわけです。

近年、プロスポーツの発展に伴い、スポーツを観て楽しむ、さらには応援を楽しむという人々が急増しましたが、自ら日常生活でスポーツを行っている人々は、市民ランナーが増えているとは言え、まだ限られています。そこには、所得格差の拡大と貧困層の増加、長時間労働、さらには公的スポーツ施設の不足などの原因があります。

国連ユネスコは、1978年、「体育およびスポーツに関する国連憲章」を採択し、人権拡張の歴史に新たな1ページを加えました。その第1条には、「体育・スポーツの実践はすべての人にとって基本的権利である。」と高らかに宣言されています。そして、それを受けて、わが国でも2011年にスポーツ基本法を制定しました。また忘れてはならないのが、1989年国連で採択され、わが国でも批准された子どもの権利条約の第31条のことです。そこには、「休息及び余暇について」の権利や「その年齢に適した遊び及びレクリエーションの活動」や「文化的な生活に参加する」権利を定めていることです。

子どもにとつてのスポーツは、現在の生活をゆたかにし、人格形成に寄与するばかりではなく、生涯学習の一環である生涯スポーツへとつながる重要なステップであるわけです。これからは、市民スポーツのすそ野を広げるとともに、子どものスポーツへの要求に応え

るため、学校と社会スポーツが共に分担しあつていく道をひらくことが求められています。

(補筆)

学校はプロスポーツ選手の養成機関ではありませんが、プロスポーツのやり方をまねてはいけないと思います。学校の部活に、監督やコーチは不要で、子どもたちが自分の頭で、技術や戦略を考え合うことが大事なわけです。「負けておぼえるすもうかな」と言われるように、負けるから、なぜ負けたのか、勝つためにはどうすればよいのか、何が欠けているのかと考え、工夫をし、自分や自分たちを高めよう努力をするわけです。今は情報化時代ですから、スポーツ種目ごとの手引き書もたくさん出ています。

顧問(教師)はあくまでも、助言者に徹し、健康管理や危険防止や学業との両立、限られた時間での効率的な練習を、子どもたちが自主的にできるようアドバイスするのが、主たる責任だと思えます。より高い技術を子どもが求める場合は、教委と中・高体連の責任で、講座など開くようにすればよいわけです。

私は中学・高校とバスケットボール、大学では陸上競技に熱中しましたが、その間、監督とかコーチから指示・指導されたことなく自主的に探求し、充実した競技生活を体験したことが、今に生きています。

(研究センター代表)



被災地の今とこれから

## 2年間の

# 間借り生活から戻る

渡 邊 隆

震災後の2年間は、逢隈小学校でお世話になった。逢隈小学校の児童・教職員・それに地域の方々には本当によくしていただいた感謝している。多くの方々を支えていただいた2年間だったが、気を遣いながらの2年間であったことも事実だ。

### 学校復校をめぐる

震災後に、保護者に対して実施したアンケートの結果、現地再校の希望は過半数には届かなかった。防潮林や防潮堤の整備が十分なため保護者から不安の声が上がった。にもかかわらず町当局が現地再校を急いだ背景には、

- ・ すでに荒浜で住み始めている人達の避難施設として整備すること。
- ・ 学校が再開されれば、地元荒浜に戻ってくる人も増えるだろうという憶測があったこと。

などが考えられる。ただ、その経過説明がPTA役員にしかなされなかったため、ほとんどの保護者は十分な説明を受けなかった。そのため、何人かの保護者が説明会を開くように声を上げた。そのことが町当局や教育委員会を動かして、これまでの経過が説明された。しかし、現地再校については、すでに決定事項であり

翻ることはなかった。何が何でも現地に戻るという気持ちの親と、不安を抱えながらどうしたらよいか迷っている親の姿が見られた。

### 引越し前の様子

4月からの現地再校に際し、各学年から数名の転出児童が出た。本当はクラスを離れたくないが、津波が怖いので転校することにした児童だ。震災を乗り終えた絆は、とても強い。荒浜小学校に止まることを選択した子どもたちについても、心のケアが心配された。そこで、3月中に二度ほど、上学年と下学年に分けてバスに分乗して学校を見るだけの日と、学校で遊んだり卒業式の練習をしたりする取り組みをした。数名が途中で体調不調を訴えた。また、荒浜小学校へ行くこと自体を拒んだ子どももいた。

3月の土曜日に学校の引越し作業をした。最初は教室関連のものを土曜日に職員とボランティアの力を借りて逢隈小学校から荒浜小学校へ運んだ。組合からも20名ほどの応援があり嬉しかった。

### 新学期のスタート

4月、最終的に荒浜小学校には130名ほどの児童が通学することになった。震災前の児童数が220名だったことを考えると、90名近くの減少である。しかしながら、間借り生活から抜け出た開放感は、子どもたちを生き生きとさせた。入学式では、14名の1年生を全校児童で迎えた。希望に燃えて順調なスタートを切ったかに見えたが、ハード面での問題が山積していた。

- ・ 家庭科室や図工室、パソコン室には机もなく使えない状態。
- ・ 図書室に書架が入っていない。
- ・ 備蓄倉庫に非常用の水、食料、毛布がない状態。
- ・ 校庭にはガラスや石がごろごろして危険な状態。

など本来、再校前に済ませておかなければならない工事が未施工だったり物品の入荷待ちだった。現地再校を急いだ結果、たと思っ。これらの工事は、遅ればせながらも少しずつ実施されてきている。

震災前から私達教職員がもつとも心配してきたことは、子ども

たちの心のケアである。

昨年度よりスクールカウンセラーも交えて、「子どもを語る会」というのを立ち上げ、各学年の児童の様子を全職員で共有する取り組みを実施してきた。この2年間は、上学年に様々な症状を訴える子が多かったが、今年度になって中低学年の子たちからも震災関連の様々な症状が見られるようになってきた。

- ・ 夜ぐっすり眠れない。
- ・ 学校を休みたがる。
- ・ 言いしれぬ不安を訴えるなどである。

また、安全を確保して不安を取り除くためにも、4月早々に津波対応の避難訓練を実施した。地震のため火災になった状態で津波が来るという想定で行った。屋上に逃げた後、学校近くの3階建ての建物の屋上まで避難するというものだった。さらに、6月9日(日)町で実施する防災訓練には全校あげて参加する予定である。

### 絆を強めた運動会

5月18日、晴天のもと運動会を実施した。児童会で決めたスローガンは「荒浜が絆でつながる運動会にしよう!」だった。子どもたちは自分たちの頑張りが、家族や地域の人達を元気づけることを知っている。児童種



荒浜小キャラクター  
おうちドン

目他にPTAだけでなく、中学生以上の地域住民も参加して玉入れを実施した。140名近くの参加があり、大いに盛り上がった。また、現地再校に伴って転校していった仲間も参加して六年生の太鼓の演技をした。子どもたち同士の絆を確認

して深めることができたことは大きな収穫だった。クリアしなければならぬ問題は山積しているが、現地で荒浜小学校を復興したことは、地域住民に希望を与えていることは確かだ。

### 今後へ向けて

当初は現地再校に伴い様々な心の問題が噴出することを心配していたが、こうして現地で学校生活をしていると、心配よりも他の学校に気を遣わずに過ごせる自由な雰囲気の方が上回っているため、大きな問題が出てきてはいないようだ。

阪神淡路大震災では、震災後3年から様々な問題が噴出したと聞いている。今後は以下のように気をつけながら進んでいきたい。

- ・ 教師が頑張りすぎないようにする
- ・ 子どもたちの前向きな姿勢を信じて任せるところは任せるところにする
- ・ 校内研修で、子どもたちが未来に希望が持てるような学びを軸に据える。
- ・ 阪神淡路大震災での教訓に学ぶ

前例がない教育活動なので、暗中模索の連続だ。しかし、ある意味前例にとらわれない実践ができると考えることもできる。

校舎2階のホールに児童中心で「希望ホール」と名付けたり、運動会で地域のこと視野に入れたスローガンを掲げたり、児童のアイデアが様々なところで生かされている。最近では、地域のごみ拾いや花を植える活動、さらには、何かフェスティバルを開いて地域を人を招いて元気づけようという考えが出されている。

教職員だけでなく、子どもたちや保護者、地域の方々のアイデアも取り入れながら学校の活動を組んでいくことの大切さを痛感している毎日だ。

(巨理・荒浜小学校)

PART III

「今、子ども時代を生きるという」と



須藤 道子

今、この時を生きる、ありのままの子どもたちに寄り添いながら、子どもたちの明日を考えあつていこうという願いからのフォーラム開催。一回目の「友だち」、二回目の「成績」に続く今回は、子どもの本質にもかかわる「遊び」を中心のテーマとして、子ども時代の日々を語り合った。話題提供してくださったのは大学生の高橋さんと保育園長・教師の皆さん。豊かな子どもとしての時を経て、今ここに存在する皆さんだった。

ていた。送迎など、一人親の母に無理をさせたが、やりたいことをやらせてもらえた。中学では生徒会役員、全体をまとめることも好きだった。

高校では硬式野球の部活に明けくれた三年間。帰宅すれば寝るだけの生活で、一浪して入学。母は何も言わず許してくれた。教育学部に進学したのは、高校まで良い先生にめぐりあつてきたから。自分もこんな大人になりたいと思つた。これまでを振り返つて思うのは家族の存在の大きさ。やりたいようにやらせてもらつて感謝している。

が、遊ぶためにはその集団にいないとダメなので泣かされたりしながら夢中で遊んだ。今だったら学校にたくさん苦情が来そうな遊び方も。一方、勉強のことはほとんど覚えていない。今の子どもたちの生活を見ているとかわいそうだ。

◎ 安達喜美子さん（保育園長）

一週間前9人の卒園式。新年度の段階ではバラバラで幼さが際立ち、波乱万丈の一年間だったが、この子たちに何を伝えるか、取り組んできた。

卒園式では一人ひとり紹介する。大縄跳びを連続10回できるまで頑張つたR子ちゃん。何回も挑戦して、みんなの大声援を受けながらやり遂げたことが、「一番楽しかった思い出」と言う。蔵王での合宿では、つかみ取りした生きたニジマスを自分達で料理する。生きていたものを自分の手で殺し食べる衝撃的な体験を「楽しかった思い出」にあげる子ども多い。

「大槌町の虎舞い」にすべての職員とすべての子どもたちで取り組んだ。「みんなに見守られた」という手ごたえのもと、バラバラだった子どもたちはひとつになった。

親たちは忙しく疲れていて、家に帰るとテレビやゲームに子守りされている。それでも子どもたちにはたくさんのお習事をさせている。不安に駆りたてられているのか。何がそうさせるのか。

◎ 大橋達さん（高校教師）

子ども時代、自分が理解できないことは「なんで、どうして」と迫る、周りからみれば「いやな奴」だったのでは。そういうとき、小5、6年の担任だった先生は、皆に「どうしてだと思ふか」聞いてくれた。

高校時代からのラグビーをしたくて、部活の顧問をしている。自分の高校時代も翔平君のように部活はか

(1) 話題提供の皆さんから 一言

◎ 高橋翔平さん（大学生）

幼稚園の頃は通園バスに乗るのが大変、母と離れることに不安があつたのかもしれない。小学生時代は目立ちたがり、気の向かないことはやらない扱いにくい子。ドッジボールやキックベースなど外での遊びがほとんど。いま、被災地で学習支援のボランティアに参加、ゲーム機で過す時間が多い子どもたちを見て、自分らとの違いを感じる。

スポ小で野球をし





りしていたが、そういう子は今は少数派。

今の高校生、何でも「これでいいのか」教師に聞く。自分で考えず、言われたとおりに行動する。大切にされて育っているようだが、周りまで目がいかない子も多い。

高校によって雰囲気気が随分違う。入りやすい高校の子どもたちは他人に対してぎすぎすしている。授業中も、いろいろ考えさせようとするが、早く答えを言ってよという雰囲気。センター試験では答えは正解はひとつ。そういうことが日常生活にも及んでいるのか。



## (2) 話し合いから — 抜粋 —

### ◎ 子どもたちの姿から見えてくること

- ・ 幼い時から失敗したくないので、チャレンジしない。「失敗したけどまた今度」というおおらかさを生活や社会に。
- ・ 学校では一緒に取り組むことの楽しさを経験させたいとやってきた。子どもたちがいつも気にしているのは親。親に疲れている。子ども時代ぐらい、自分らしくいられる場を保障してあげたい。
- ・ 統廃合でスクールバスで登下校、マンションはオートロックなど、群れで遊ぶことができなくなっている。

・ 幼・保一体の「子ども園」。民間委託の中で

見栄え良く子どもを追い込む。

- ・ 子ども園で、45分間坐っせいられる子どもを「売り」にするとはどういうことか。
- ・ 母親が家にいないなどで、何でも学校に期待され、教師は評価対象で気の毒。

### ◎ 今、をのり超えるために

- ・ 子どもは自分でいろいろできるようになっていくなかで、自分の成長を誰かに承認してもらいたい。
- ・ できること、分かること、点数を取ることが唯一の価値として子どもに込み込んで行く。子どもたちを集団で預かる場の責任は大きい。
- ・ いろんな命に触れて育った。ひどいこともしたと大人になって思う。何でもはじめから禁じられて、何が育つのか。
- ・ ほめることができるようになることへの評価にならないよう、その子の成長の認め方を考えたい。

・ 子どもたちは自分の意見を聞いてもらえる体験をして、変わっていく。「子ども時代≡学校」みたいななかにあって、学校以外で自分を認めてもらえる場があればいい。

・ 親には比較的好きにさせてもらったが、周りの子はそうでもない。自由が許容されていた前の時代ではそこはどうだったのか。

・ 親たちはあまりにも孤立している。だからしない自分をさらけ出し、つながりあえる大人の関係の中で、子どもへのプレッシャーが消える。

・ 縛られている教師のつくる空気が子どもたちにも伝わる。そこを変えないと子どもたちは安心して学校で過せないのでは。

・ 遊びって何か。徹底して自然とかかわって、

自分の都合で動かせないもの、人間の思い通りにならない世界を知っていく。面白く遊ぶために折り合いをつけ、他者を受け入れていく経験が積まれる。あそびの中で知恵も獲得することで結び合う、教室ではその可能性にかけた。

- ・ 点数や評価があるからというのではない、学ぶことの面白さを伝えられる授業、学校を。
- ・ どうしたら今のような社会でも少しでもまじな子ども時代をつくってあげられるのか、制度や世の中のせいにせず、一人ひとり考えてくことが大事。

## (3) まとめにかえて

最後に、「翔平君が『やりたいことをさせてくれた親に感謝、いい教師に出会ってきたことが進路に結びついている』と話してくれたことに希望を感じた」という感想が述べられた。翔平君からの、大人への何よりのエールということではないか。

政治の方向によって教育や学校のあり方がゆがめられ、競争の教育が及ぼす影響の深刻さは近代の常態としてある。しかし、最近、余りにもあからさまにその方向が強化されている。子どもから悪くなる社会はあり得ないし、子どもたちが幸せに生きられない社会で、誰が幸せになれるのだろうか。

大きな流れに抗うには一人ひとり非力である。本音と建前の相克もある。だが、3回のフォーラムは、思いを聴き合い、迷いや互いに分かり合えない部分を受け入れ合いつつ、大きくつながって行くことの大切さと、語りあっていく中で見出せるものがあることを指し示してくれたと思う。

(研究センター事務局)

# 「体育の子——生活体育をめざして」

(佐々木賢太郎著) を読んで

黒川 哲也



私はこれまで佐々木賢太郎『体育の子』と何度か出会い、そして出会い直す機会に恵まれながらも彼の実践から深く学ぶことができずにきた。そんな私がこの報告を引き受けてもよいものか一瞬迷ったが、いつまでも手をこまねているわけにもいかず、また、最近の研究関心からしても何らかのきっかけになればと引き受けることにした(だからといって、そんなにたいしたことを記すわけではない)。

私が『体育の子』と最初に出会ったのは、1990年代初めであった。当時私は、卒論のテーマとして教科内容としての科学を学び取ること、子どもたちが日々の生活の中で抱えこまれた生活課題・発達課題の克服を同時に追求することができるような体育カリキュラムを編成するための原理を見つけ出すことに取り組んでいた。その中で「体育の生活化」を学校体育の主要な目標とした戦後初期の体育実践、いわゆる「生活体育」の時期に着目したのは自然の成り行きであった。

戦時中、修身科とならぶ軍国主義教育の主要教科として位置づけられていた「体錬科」の戦後教育改革は、軍事的教材の禁止や形式的規律訓練や教師中心の画一的指導からスポーツ教材の導入、児童の個性・自発性重視の指導へと転換となつて現れた。また、体育のカリキュラムは「運動会」や「水泳大会」など体育行事を中心として、これに向けて教科と教科外を結びつける形で構想さ

れた。そこでは、学校における体育(レクリエーション)に関わる生活を民主的・合理的に運営することができるような問題解決能力の形成が目指されていた。

ところが、学校に通つてくる子どもたちの現実の生活は、戦争の傷跡と戦前からの封建遺制の残存による貧困と抑圧の中にあり、彼らの発達を歪め、彼らのところからだに深い傷を負

2月23日、佐々木賢太郎さんの『体育の子』をテキストに、第2期最後の「講座・戦後教育実践書を読む」を行なった。案内人を引き受けてくれた矢部英寿さんは、「学生時代に読んだ時はあんまり面白くなかった。わけがわからなかった」と、当時は振り返る。その一方で「今読むとものすごく深く、ものすごく面白い」と、その魅力を語った。

ここでは、そんな矢部さんと一緒に体育の授業づくりや研究をし、また今回の講座に学生の皆さんと参加してくれた宮教大の黒川さんに、ご自身と『体育の子』との関わりや、今の時代にあらためてこの本を読む意味などについて書いていただいた。

わせつつあった。栄養不足と厳しい労働の中で子どもたちのからだは育ちまわることができず、硬く閉ざされてしまっていた。生きる見通しを掴むことができず、彼らはあきらめの中によどみ、刹那的に死をも願うほど押しつぶされていた。この現実を真正面から受け止め、体育教師として子どもの「からだ」を切り込み口として教育実践を創り出していったのが佐々木賢太郎であった。佐々木は、子どもたち自身にこころとからだの現実を気づかせ、それを解きほぐし育てること、さらには、こころとからだを歪める社会的要因を掴ませていくこと、そして何よりもこの社会的要因はさまざまなる形を取ってクラスみんなの苦しさに現れているのである。子どもも教師も「つれもて」戦つていかなければならないという自覚を育てることを教育実践の課題とした。ここには先述した「体育の生活化」に見られる「生活」の捉え方の皮相さ牧歌性、現実適応主義は存在しない。佐々木にとつて教育実践は、子ども

と親や教師を含む大人たちの「人間らしく生きたい」という願いとそれを抑圧し、否定する社会との戦いとしての厳しさの中で捉えられていた(ただし、「体育の生活化」を目指した理論と実践は、その後「スポーツ分野における文化変革の主体を育てる」ことを理論的にも実践的にも深め、牧歌的な生活観を克服してきている)。

当時生活綴方教育、中でも北方性教育に傾倒していた私は、佐々木の実践に強く引かれた。戦中生まれの子がまさに『体育の子』に登場する中学生たちと同世代であり、断片的にはあるが彼らから聞かされた子ども時代の苦しさやつらさと共通するものがあったからかもしれない(実際、母親は父親の戦死と母親の病死のために親類にあずけられて中学を卒業し、「手に職を」と美容師になり、父親は餅の行商を生業とする祖母との貧しい暮らしの中で、毎朝足踏みの杵臼で餅をつくことを日課としていたという)。ただそれは「気になる」レベルにとどまり、佐々木の実践を関心の真ん中に置くことはなかった。

佐々木との出会い直しのチャンスは案外早く訪れた。大学院を出て広島専門学校に非常勤講師として勤め始めた年の5月、授業を連続で欠席していた女子学生に「どうした?」と尋ねた。体育実技の授業で出席を取った直後、周りには同級生が多数いる中、彼女は「あー、その時私、子ども堕ろしたんよね」と大きな声で答えた。絶句した。今から思えば、彼女は中西新太郎のいう「平気感覚」で過ごすしか、今にも崩れ落ちそうな自分を保つことができなかったのではないかと思いをめぐらせることができる。しかし、山口の田舎から広島という「大都会」に出てきたばかりのあんちゃんにとって衝撃的な出来事だった。学生時代に様々な実践記録のなかに現れた子どもの生活の現実、彼らの抱え込んだ寂しさやつらさを知っているつもりでいた。しかし、佐々木のような「覚悟」はできていなかった。その後も友だちに支えられること、期待されることのプレッシャーに耐えきれずリストカットを繰り返す子、高校時代の崩れた自分を仲間を支えられながら乗り越えようとした途端、変わっていく自分を信じることができず仲間を

裏切り学校を去って行った子、表面的には仲良しグループでありながら、ネットの世界では互いを非難し合う友だち関係の苦しさや自殺未遂という形ではしか表現できなかった子……。さまざまに若者と関わりながら、私は彼らに寄り添いきれたと言えないし、ましてや彼らに苦しさやつらさの原因をつかみ取らせ、彼らをつなぎ合わせることはできなかった。彼らはそれぞれのやり方で「苦しい」「つらい」と叫んでいた。にもかかわらず、私は佐々木のように、自分の生きづらさを彼らと「共通の運命観」のもとで捉えられていなかったのかもしれない。

そして近年、子どもたちは苦しい、つらいと叫ばなくなった。教科書に書いてある知識を意味もわからず「将来のため」「受験のため」と自分を納得させながら覚え込む授業に魅力はない。かつては「勉強は嫌いだけど、友だちがいるから学校に行く」子どもたちは多かった。いまでもそうだろう。しかし、スクールカーストといわれる抑圧的な関係は、彼ら同士を生きづらさを共有する他者として認め合うことやこれを協同して打ち破っていく知恵や技法を獲得することを妨げる「力」が働いていることを覆い隠してしまう。生活の様々な側面を「勝ち組・負け組」に分け、その結果をすべて自分の責任だと思いつまみせるこの「力」は、子どもたちを他者や世界から引き離し、孤立させてしまう。『体育の子』の時代とはその内容や質を異にするものの、子どもたちの生活は今日においても「貧困(関係の貧困)と抑圧」の中にある。

学校教育は子どもの生活を変えることなどできない。しかし、彼らとともに学校の中に生きづらいう日常とは「別の世界」を一時的にも創り出すことは可能であろう。この「別の世界」を創り出す過程でこそ、子どもたちは抱え込まれた生きづらさを自覚すること、その原因が何なのかをつかみ取ること、そして他者を生きづらさを共有する仲間として捉え直すことが可能になるのではないだろうか。このとき佐々木の実践から学ぶことは多い。

自分の実践の未熟さを嘆いてばかりいても仕方がない。私も学生たちと「つれもて」生きづらさとの戦いを始めよう。

(宮城教育大学)

# ピッカピカの1年生との 楽しい生活



野田由美



前任校で低学年を5年連続で担任しました。入学式からいろいろな個性を見せてくれる子どもたち。1年生の子どもたちとの楽しい生活について、いくつかの場面を通して伝えます。

## 入学式

入学式用の服を着て、真新しい空っぽのラ

ンドセルを背負って、おうちの方と教室に入ってくる子どもたち……。でも、担任は、その姿を見ていません。その頃、担任は、初めての授業の最終確認中です。子どもたちとの出会いに、わくわくとどきどきの時間です。

式が始まりました。はじめは緊張して座っていた子どもたち。でも、2年生の「お迎えの言葉」が始まると楽しい内容の発表に緊張がほぐれ、笑ったり、知っている2年生を見つけて手を振ったりする子もいました。退場では、保護者の皆さんは可愛いお子さんの姿を見つけてカメラを構えるなど、温かい雰囲気のまま式が無事終了しました。

教室に戻って、いよいよ初めての授業です。この時の子どもたちの瞳は、本当にキラキラ光っていると感じます。これから始まる小学校生活への期待に満ちあふれていて、この瞳をくもらせてはいけないと責任を感じる瞬間でもあります。座り方や話の聞き方等を指導した後、一人一人名前を呼んで「よろしくね」「仲良くしようね」と言いながら握手をしました。元気に「はい。」と返事をする子、「よろしくお願いします。」と言える子、恥ずかしそうに手を出す子、笑顔を見せてくれる子……いろいろな表情を見せてくれました。

最後に、「しゅくだい」という絵本を読み聞かせました。「宿題」と聞いて、子どもたちは「ええっ」と驚きの声を上げました。本の内容は、

小学校の先生から、おうちの人に抱っこしてもらって今日あったことを話す宿題が出された。でも、みんな忙しくて、なかなか宿題ができなくて困っていたけど、勇気

を出して話したら、家族みんなが抱っこして話を聞いてくれた。

というものです。本当は、おうちの人に聞いてもらいたくて読んでいます。「入学しての環境の変化で体も心も疲れる時期なので、いつもよりたくさん抱っこしてお話を聞いてあげてください。」とおうちの方に宿題なのです。

## 勉強大好き！

1年生は、勉強が大好きです。学校では、お兄さんやお姉さんのように、ノートにかつこよく文字を書いたり計算したり、テストで100点を取ってお勉強をすと思っているようです。だから、入学して数日は、生活や歌の学習が主なので「今日も勉強しなかった……」とがっかりする子もいます。（これも大事な勉強よ……）と思いつつ、「明日は、鉛筆を使って勉強をしますよ。」という「わあい！」と大喜びするのです。

話し言葉から書き言葉へ世界が広がり、数の概念も獲得して、少しずつ小学生らしくなっています。

## ほめほめ大作戦

入学式の翌日からは、子どもだけで登校します。友達と一緒に「おはよう！」と言いなから教室に入ってくる子、黙って教室に入ってきてきよるきよる辺りを見回している子、「おうちに帰りたいよお。」「ママに会いたいよお。」と泣く子もいます。

さて、『ほめほめ大作戦』開始です。「一人でお話を聞いて、えらかった。」「座っている姿

勢が、かつこいい。「もう、ランドセルの用意できたの？ すごいね。」「大きな声で挨拶できたね。挨拶名人だね。」等々、気がついたことは何でもほめまくりです。友達がほめられると、自分もほめてもらえるように頑張るのが1年生の良いところです。

でも、一人だけ、あまりほめてあげられないA君がいました。朝から、お友達とけんかをしたり、走り回ったりしているのです。なかなか椅子に座っていられず、授業中も黒板の前に来てしまいます。困って、先輩の先生方や特別支援学級の先生に相談しました。すると、「怒られることをする前にほめれば？」とアドバイスをもらいました。

早速、次の朝から、A君が教室に来たら「おはよう。今日も学校に来てえらいねえ。今日もいい子だね。」と握手しながらほめることにしました。はじめは逃げ回っていたA君でしたが、だんだんと握手に慣れてきて、1週間もすると、ランドセルを一人で片付けて報告してくれるようになりました。給食もいつも残さず食べるので、それもほめます。友達とのトラブルで叱ることも多かったです。ですが、良いことをするとほめられることを分かってくれたようです。

## コミュニケーション

ある男の子が私の手伝いで、マグネットのついた色紙を黒板に貼っていました。そこへ別の男の子がやってきて、手伝っていた子を押して色紙を取りました。「どうしたの？」と訳を聞いても話してくれませんか。「どうしてお

友達を押ししたの？」と聞くと「ほくも、色紙を貼りたい。」と答えました。(ああ、お手伝いしたかったのだ。)と分かったものの、押されて色紙を取られた子は泣いています。「そういうときは、『僕にもやらせて。』って言うんだよ。」と話しました。

休み時間に校庭で鬼ごっこをしていた子どもたちが、チャイムが鳴って戻ってきました。「僕を誰も追いかけてくれない！」と怒っている子がいます。悔しくて、鬼をしていた友達をたたいたそうです。周りの子たちに話を聞くと「だって、まざってなかつたよ。」と言います。はじめにじゃんけんして鬼を決めたときに、その子は混ざっていなかつたそうです。怒っている子に聞くと「まざつた！」と頑張ります。「誰かに、『まざて！』って言った？」と聞くと「だって、まざつたよ。」と繰り返します。「後から遊びに混ざるときは、『まざて！』って言うって『いいよ。』って言われたら遊べるんだよ。」と話しました。

「貸してちょうだい。」「遊びにまざて。」「ちょっと待っててね。」等々、言葉でやりとりすることが苦手な子どももいます。遊びを通して、けんかもしながらコミュニケーションのお勉強です。

## 初めてのプール

6月になると、プールでの学習が始まります。シャワーも腰洗い槽も水がとっても冷たくて、水に慣れていない1年生には大変です。

顔に水がかかるのが嫌なのに、シャワーで頭の上から水をかけられるのです。でも、この二つをクリアすれば、大好きなプールで遊べるので、キヤーキヤー言いながら冷たくても我慢します。

水がとっても苦手な子どもがいました。「プールに入らない！」と教室から出ようとします。着替えもしません。「暑いから、足だけ水につけたら？」 気持ちいいと思うなあ。」と言っても、動きません。「プールは嫌い！」と言って、動こうとしません。休み時間、いろいろ話をしたのですが、気分は変わらず、結局7学年の先生にその子をお願いして、担任はプールに向かいました。20分後、手にペットボトルを持ってプールに現れました。ペットボトルに水をくんで遊ぼうと言ったら気持ちが変わったそうです。

その子も、夏休み明けには、プールに入れるようになりました。夏休み中に友達とプールに来て遊んでいたそうです。それでも、「絶対に潜らない。」と言って、プールサイドにかまつていました。「それでもいいよ。」と言いながら、とても嬉しい気持ちになりました。

初めての〇〇を通して、いろいろなことができるようになる1年生。入学した時の姿を思い出し、その成長を感じることができる楽しい日々が1年生との生活です。

(仙台・原町小学校)

# 私と先生、そして

渡辺 玲子



「先生なんて、私のこと、なんにもわかっていないくせに」

オール5、オールAの通信簿を前に、10歳の私は、つぶやいていた。

そう、私は、超優等生だった。でも、たぶん、ずっとそれが嫌だった。

その先生は、おにぎり先生と呼ばれていて人気の先生。でも、えこひいきするんだって、との裏評判もあった。わたしは、えこひいきされていた（と思う）。

ある時、それが原因なのかどうか、女の子たちに仲間はずれにされた。誰かの転校のお別れ会に、出し物をプレゼントする学級会か何かだったと思う。誰も出し物を一緒にしようと言ってくれない。時間はすぎてゆく。じゃ、ひとりで歌おう、とその当時「みんなのうた」で流行っていた歌をひとりで歌った。

おにぎり先生は、わたしの苦渋の決断を知ってか知らずか、その行動

をみんなの前で褒めた。「あーあ、ほめられちゃった……」と、10歳のわたしは思った。

おにぎり先生は、きつと悪い先生ではなかったはずだ。でも、私の小さな小さな生きづらさとは、向き合ってくれていなかった、のかもしれない。

5、6年担当のささき先生は普通の先生だった。だから、ささき先生の思い出はそれほど強くは残っていない、たった一言の言葉をのぞいては……。

卒業文集の一人ひとりへの先生からの一言欄。ささき先生は、私に「もつとしゃべれ」と贈ってくれた。

思春期の入り口、ませた12歳の私は、自意識過剰の真つた中にいた。私の心の深いところにある私も気付かないようにしていた小さな生きづらさを、ささき先生は、そつと、

卒業のはなむけの一言として贈ってくれた。

バスケ部顧問の理科のアサノのことは嫌いだ。おまけに中2の担任だった。

定期試験、アサノが回ってきて私の机をトントンとたたいた。「なによ！」と、うるさがった私。記号で書くところを言葉で書いてしまっていた。それを、アサノはあの時教えてくれた、と後から思った。でも、嫌いだ。

そのアサノが、1週間ほど学校を休んだ。お母さんが亡くなったんだって、とみんなが言っていた。忌引きが明けた日、偶然に、アサノがひとりで体育館にいるところを見かけた。アサノはひとりでフリースローをしていた。その背中は、寂しそうだった。先生も私と同じ「ひとりの人間なんだ……」と思った。生きづらさを持つひとりの人間なんだと。

中学3年生は、楽しかった。でも、どこかでいつも、今のこの私は本当の私じゃない、と思っていた。自意識過剰も相変わらずバリバリだった。

その年、若い先生が何人か赴任してきた。きょうこちゃんは、理科の

先生で担任。しよんつあんは、部活の顧問。どちらも20代後半の先生だ。しよんつあんは、生徒を呼び捨てにした。「れいこ」と私のことも呼んだ。きょうこちゃんは「戸田さん」がいつしか「とだ」と名字の呼び捨てになった。優等生の私は、「戸田さん」としか呼ばれたことがなかった。戸田さんの前には「優等生の」が付いているような気がいつもしていた。自意識過剰だったから……（笑）

「れいこ」も「とだ」も心地よかった。優等生の制服を一枚脱ぎ捨てられたような気がした。単純だ。

でも、その単純さは、若い先生たちが、一人ひとりの生徒たちの生きづらさと無意識に自然に当たり前に向き合っていたからなのかもしれない……。教科とか生徒指導とか、そんな枠など関係なく。今、そう言ったら、退職したきょうこちゃんもしよんつあんも笑いながら真つ向から否定するかな？ きつと。

中3の文化祭で4組はお化け屋敷をした。小学生からも、入場料を取ってしまった。学級委員だった私は、同じく学級委員の鹿野君と一緒に職員室に呼ばれて、文化祭担当の先生に怒られた。3年の先生たちもみんなそこにはいた。入場料を取ってはい

た。

その年、若い先生が何人か赴任してきた。きょうこちゃんは、理科の

先生で担任。しよんつあんは、部活の顧問。どちらも20代後半の先生だ。しよんつあんは、生徒を呼び捨てにした。「れいこ」と私のことも呼んだ。きょうこちゃんは「戸田さん」がいつしか「とだ」と名字の呼び捨てになった。優等生の私は、「戸田さん」としか呼ばれたことがなかった。戸田さんの前には「優等生の」が付いているような気がいつもしていた。自意識過剰だったから……（笑）

## ご案内

### フォーラム 子どもたちの今と未来を考える part 4

## 「部活」を語ろう、考えよう！

と き 7月13日(土) PM 1:30 ~ 4:00

ところ フォレスト仙台 4F 会議室 (参加費は無料)

【話題提供】 中・高教師、保護者、研究者などを予定

中・高校生にとって、「部活」は、学校生活の楽しみの一つです。「部活」がなければ学校が楽しくないと考える子どもも少なくありません。放課後や休日の過ごし方にも「部活」は大きく影響します。

一方、「試合やコンクールで結果を出す」ことが大きく求められている現実、部活に持ち込まれやすい「精神主義」が体罰につながる等の課題も指摘されています。

子どもたちにとっての「部活」の今とこれからの語り、考え合いたいと思います。

### 第3期 講座 戦後教育実践書を読む

## 第1回 宮崎典男 著『人間づくりの学級記録』

案内人：佐々木敦 さん (下増田小学校)

と き 8月3日(土) PM 1:30 ~ 4:30

ところ みやぎ教育文化研究センター (参加費は無料)

授業実践記録には、その実践の行われた時代状況とともに、子どもたちと悪戦苦闘する教師の願いや思い、その取り組みのなかでみせる子どもたちのさまざまな姿が刻まれています。

改めて、戦後の教育実践を読むことを通して、私たちの今と、教育と子どもを語り、教師の仕事について考え合いたいと思います。ぜひ、ご参加ください。

(以下、2回以降の予定です)

第2回 (9月28日・土曜) 鈴木生気 著『川口港から外港へ』

案内人：高橋誠さん (宮城歴教協)

第3回 (11月16日・土曜) 小林 実 著『幼い科学者』

案内人：鈴木吉雄さん (宮小学校)

第4回 (1月18日・土曜) 近藤益雄 著『おくれた子どもの生活指導』

案内人：斎藤智子さん (袋原小学校)

けない、と怒られたが、誰も、優等生の戸田さんがそんなことをするなんて思わなかった、なんて思っていないことはすぐにわかった。私は実に気持ちよく怒られた。

しよんつあんが美術の古山さんと一緒に、夜突然に酔っぱらって、「いいこお」と家を訪ねて来るような平和な時代だった。そんな先生たちにお風呂上がりの母が、にこにここじ

ールを出すような平和な昭和だった。でも、きつと、生きづらさは誰のものにもあったはず。向き合うか、向き合わないか、答えは言うまでもない。今も昔も、昭和も平成も。

「どうやら、僕は旅立つらしい。目の前には大きなリュックが二つもあ

る。」そう言って、息子の由は、大を休学して世界一周に旅立った。彼も、きつと、自分の中の生きづらさと向き合おうとしているのだろう。

ある研修で、保育士は「対人援助職」だと言われた。だから、自分のことも大切にしつつ、虐待や貧困や精神疾患などにも対峙していかなければならないと。

※ 学校体育研究会宮城支部機関誌「一ノ蔵」より本人の許しを得て転載

(保育士)

飲み込まれそうな不安と恐怖さえ感じる巨大な生きづらさと対峙しなければならぬ時、信頼できる仲間たちの存在がその支えになることは間違いない。

だからこそ……。

# センターの動き

## 4月

- 1日 新年度スタート。なんとか、その任をまっとうできますように。
- 2日 安藤正一さんから通信を読んだのハガキが届く。安藤さんからはいつも励まされる。
- 6日 仙教組春の講座。若い人が多いのに驚くことに希望をもつ。
- 9日 午後、石田さんの後任の運営委員を決める小委員会。田中孝彦さんから電話。
- 12日 今年度第1回事務局会議。今年の事業についてのつづきを話し合う。ホームページ、高橋さんと契約。
- 15日 ヤスパース読書会。
- 16日 午後、国語実践書編集委員会。
- 17日 遅くなつてしまった

## ◆本の紹介◆

### 山形 孝夫 著 『黒い海の記憶』

本書の「おわりに」で著者は、『死者を記憶』し『死者に向き合う』ことがいかにかけがえない絆であり、命綱であるか、ということ、私はこれまで語りつづけてきたのでした。それが、『生きている死者』であり、『死者の語り』なのです。」と書いています。

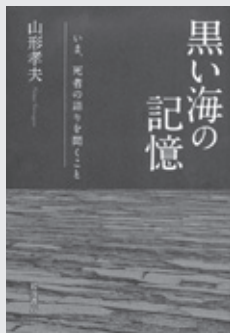
著者の「死者と生者」についての語りへの私の最初の出会いは「死者と生者のラストサバー」で、私にとつてこれまでなかった世界への道案内でした。

今度の著書の私への問いは前者よりも鋭く深いものでした。私が、3・11後被災地を歩きつづけているからでしょう。歩きながら、どれだけ「死者に向き合う」自分であるかの問いが読むほどに自分に迫つてきて、読み終えた時、今ここにいること、時々被災地に立つ自分の在り方をあらためて考えざるを得ませんでした。

読んでいて、中学2年で逝つた父の死後の「口寄せ」の光景が浮かんだのです。ローソクの明かりでミコを囲み、親戚縁者が「そうかそうか」「そうだったのか」と涙を流しながらうなずき合い、父に語りつづけるのでした。見守る私には、これが父との本当の別れのように思つたのでした。

講演その他の文が集められた1冊ですが、その表紙のタイトルを聞くと、小さく「いま、死者の語りを聞くこと」とあります。3・11の死者の語りを私たちが本気で聞くことなしに壊れかけている日本の立ち直りはないと言っているようにも思いました。

(かすが たつお)



定価 (本体2000円+税)  
発行 岩波書店

が、林竹二さんの眠る北山霊園に行く。桜満開。

18日 4時から新高校入試制度についての話し合い。

19日 国語実践書の仕事を一日やる。

22日 ホームページについて打ち合わせ。福田誠治さんの講演会6月16日に決まる。

23日 午後、震災と教育について話し合い。

24日 清岡さん、通信の71号の内容をおおよそを決め、書き手への依頼を始める。

25日 午後、国語の編集委員会。

26日 事務局会議。年間事業で落ち着いたものの報告。

28日 午後、講演会。演題「安倍政権の『教育再生』と日本のゆくえ」。講師は小森陽一さん、熱演。

30日 10時から、入試シンプの打ち合わせ。

## 5月

1日 別冊の原稿まだ決められず。

7日 山本さんへの「高校生

の公開授業」の依頼状を書く。3時過ぎ、高橋満さんと今年の打ち合わせ。

10日 10時から入試問題の集まり。事務局会議。

フォラム部活についてはいろいろな意見が出る。

13日 山本さんから返事。残念ながらアウト。午後、ヤスパース読書会。

14日 10時、県教委高校教科書課に行き、入試についての話をきいてくる。午後、国語実践書編集会議。

17日 午前、国語実践書に

つける教科書外作品の打ち込み。

20日 3時過ぎから、高橋満さん・賀屋さんと3年目のまとめの話の続きをやる。報告の筋立てを決め、残る聞き取りの相手を確認。

21日 震災と教育についての話し合い。清岡さん、県教委に原稿校正を頼みに行く。

22日 10時から、高校入試を考える会の打ち合わせ。シンポジストも保護者をのぞいてそろつた。やはり問題は当事者である教師・親の参加と意見交換がうまくいくかどうかだ。

24日 事務局会議。フォラム部活も固まる。

27日 きた出版とパンフのうち合わせ。

28日 午後、国語実践書編集会議。

29日 国語実践書で使わせてもらう人をお願い状を発送。住所を探しながらで半日かかる。

## 6月

3日 小堀恒男さんから「川平治先生」2冊贈られる。別冊使用の原稿校正に時間をすいぶんとつてしまう。

4日 午後、会館理事会。12年度の会計報告と監査報告。福田さんから講演レジュメ原稿が届く。A4版で18ページ。すごいレジュメだ。

5日 運営委員会と事務局会の内容について2人で

の話し合い。

6日 パンフ「安倍政権は憲法と教育をどのように変えようとしているのか」、仕上がり。1時半から事務局会。3時から第1回運営委員会。それぞれから、今の仕事を通しての具体的な話が聞かされる。センターとしてどう生かし取り組んでいくかは、容易でない課題であるが。

7日 午前、パンフの発送作業。午後、武庫川女子大学の田中孝彦さんと渡辺さん来室。来年度の臨床教育学会の研究大会の共催についての話。

10日 きた出版に別冊の組みをもう一度頼む。本誌の方は清岡さんの手で順調。

11日 別冊の校正。書き手にも読み手にも喜ばれない心配大いにあり。大失敗だ。

12日 福田講演会のレジュメの製本。清岡さん、きれいに刷り上げてくれた。

14日 入試シンプについての打ち合わせ。夜、仙教組と一緒に月例「若い教師の学びの会」、参加者は少なかつたがみな熱心。

16日 講演会。演題「テラストなし、競争なしでも『学力世界』」—あらためてフィンランドの教育に学ぶ—、講師 福田誠治さん(都留文科大学)。

17日 ヤスパース読書会。

18日 国語実践書編集会議 (春日)